

おじいちゃんのぶどう

東京都江東区立小名木川小学校 六年 浜田 果奈

秋になってぶどうを口にすると、おじいちゃんを思い出す。

おじいちゃんの家にはブドウの棚があつて遊びにいくと、はさみで枝を切つて食卓に、

「はい、どうぞ。食べてみて。」

と言つてみずみずしいぶどうを出してくれた。一年目は口にした後、すぐくすつぱくてくちびるがしわくちやになるほどだった。次の年またぶどうが食卓に上つた。

「どうせすつぱいだろうし、いやだな。」

と思つたけれど、「だまされたと思つて食べてみて。」というおじいちゃんの言葉に背中を押されて食べてみた。「あまーい。スーパーで売っているぶどうよりおいしい。」私は、思わず声を上げてしまった。おじいちゃんに甘くなつた秘密を聞くと、枝を間引いたり肥料をたくさんあげたりしなくてはならないそうさ。でも、「何よりも大事なのは子供や孫においしいぶどうを食べてもらいたいと思う気持ちだよ。」と、言つてガハハと笑つた。やっぱり大切なのは愛情なんだということがわかつた。そして、次の年にはキウイが、またその翌年にはみかんが果物の棚の仲間に加わつた。まほうをかけたかのようにどんどん果物の種類が増えるのがとても不思議だった。毎年おじいちゃんの家から届く段ボールに入つたきらきらしたぶどうやキウイ、みかんなどの果物の詰め合わせに、私の心は踊つた。

おじいちゃんは何歳になつてもいつも新しいものに挑戦する好奇心のかたまりのような人だったのだと思う。私もおじいちゃんのようなあきらめることのない人間になれるかな。そんなおじいちゃんもおとしに亡くなり、おじいちゃんとの思い出の家もぶどう棚も取りこわされてしまった。今年また、ぶどうの季節となつた。ぶどうを見かけると、

「食べてみて。」

と笑つてるおじいちゃんの顔がスーッと思い浮かぶ。